

1 密植栽培に 向く品種

① 高性白

「F₁晴姿」…着色部は白色で、中心部が少し桃色味を帯びます。草丈は80～90cmとよく伸び、葉も小さく立性で重ねのよい品種です。最もフラワーアレンジタイプに仕立てやすい品種で、染色やグリーン葉牡丹にも利用されます。高性白にはその他にも「F₁初夢」「F₁バイカラートーチ」があります。

② 高性紅

「F₁初紅」…着色部は明るい濃紅色で、草丈は60～70cmです。葉が立性で重ねのよい品種です。紅系の中ではアレンジタイプに仕立てるのに適した品種です。紅系には「F₁冬紅」もあります。

③ 高性桃

「F₁ウインターチェリー」…着色部は淡紅色で、オータムカラーの色調になります。草丈は70cm程度で伸びやすく、葉が立性で重ねよく、「F₁晴姿」「F₁初紅」とも合わせやすい品種です。



↑「F₁晴姿」



↑「F₁初紅」



↑「F₁ウインターチェリー」

アレンジ用の 切り花素材に向く！

高性種葉牡丹の 密植栽培方法



↑密植栽培で作った葉牡丹は切り花以外でもアレンジメントとして利用でき人気が高まっている（写真は播種を早めたので、グリーン葉牡丹となっている）。

タキイ研究農場
前田 裕行

葉牡丹は、花壇材料の少ない冬季に花壇で楽しめる材料として古くから栽培されてきました。紅・白の色彩から、正月を彩る植物として日本で発達した園芸植物です。

1990年ごろから切り花用の品種が種苗会社から発売され、花壇材料だけでなく、切り花としての利用も広く普及し始めました。正月の花材として用いられることが中心でしたが、最近では、より葉を小さく茎を細く仕上げる栽培方法の工夫や、桃系、日の丸系の葉色の追加もあり、フラワーアレンジメントの材料にも利用されます。また、切り花の染色によるカラフルな葉色の葉牡丹も見られます。さらに葉物用に栽培され、播種期を早めることで着色しない切り花をグリーン葉牡丹として利用することもあります。

さまざまな用途に利用されるようになった切り花用葉牡丹について、今回は、アレンジメントに向く密植栽培方法をご紹介します。

2 栽培方法

本葉2～3枚が定植適期

① 播種

7月中下旬に播種します。200穴トレイに1粒まきするか、育苗箱に5cm間隔で条まきにします。発芽適温は20～25℃で2～3日で発芽します。直まきする場合は、シーダーテープ（6cmピッチ1～2粒加工）を利用すると省力的に播種できます。

② 育苗

発芽が揃ったら萎れさせないように注意しながら灌水は控えめにし、日の当たる風通しのよい場所で育苗して徒長させないように管理します。

子葉が揃った時点でBナインを散布すると徒長を抑えることができます。

③ 定植

定植床は日当たりと排水のよい場所を選びます。過湿になりやすい場所では、高畝にするなどの工夫をします。堆肥や肥料はあらかじめよくすき込んでおきます。施肥量は一概にはいえませんが、CDU化成などの肥料を10a当たりチッソ成分で8～12kg施用します。圃場に残肥が多い場合は無肥料にします。

播種後20日前後で、本葉2～3枚が定植適期になります。定植は遅れないように注意し、日差しの強い日中を避けて行います。植え付ける時に茎が真っすぐになるように植え付け、子葉を土に埋め込まない程度にやや深植えにし、苗が倒れないように株元の土をよく押さえます。初期の倒伏は草丈の確保の上でも、切り花利用の上でも問題になるので、細心の注意を払います。定植間隔は、あらかじめ畝に張っておいた15×15cmのフラワーネットのます目に2本植えにします（図）。シーダーテープ利用の場合は12～15cm目のネットを張ります。

病害虫対策

幼苗期は、シンクイムシ、コナガなどに注意します。特にシンクイムシは生長点を食害し、商品性を失うことになるので注意が必要です。病害虫防除には登録農薬を散布します。生育途中ではアオムシ、コナガの発生に注意し、薬散のローテーションを組んで防除しましょう。発生初期に抑えることが大切です。

栽培管理のポイント

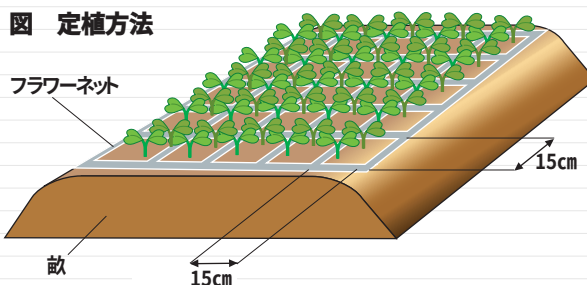
灌水は、活着までは十分に行い、活着後も畝が乾き始めたならたっぷりと灌水し、茎の伸長を促します。フラワーネットは、植物体の伸長に合わせてこまめに上げていき、茎が曲がらないようにします。

茎の太りすぎや、葉がちにならないように草丈が30cm



↑ 2本植えでの生育の様子。倒伏しないように注意することが大切。

図 定植方法



↑ 1本植え（左）と2本植え（右）の株の大きさの違い。2本植えの方が茎も細く、ヘッドも小さい。



↑ 葉がちにならないように、草丈30cmのころからこまめに葉かきを行う。



↑ 下葉をかくことで茎の伸長と太さを整え、株元の風通しをよくする効果がある。

のころから葉かきに入ります。目安としては、草丈の3分の1程度の葉を残し、下部の葉はすべて摘除します。この時期までに、茎が太く葉が大きくなるようであれば元肥の量が多いと考えられ、早めに葉かきに入り草勢を抑えます。順次3～4回ぐらい生育に合わせて葉かきに入り、茎の伸長と太さを調整します。下葉をかくことで同時に株元の風通しをよくする効果もあります。

逆に草丈が伸びず、株も大きくならない場合は、初期の活着不良、灌水不足、あるいは過湿による根傷みなどが考えられます。十分な灌水および液肥による追肥も生育に応じて必要になります。

3 出荷期

出荷の約1週間前に最終葉かきを行う

葉牡丹の着色は、低温により発現します。最低気温が12～13℃くらいに下がり始めてから約1カ月を経過して着色します。早ければ10月の下旬から始まり、寒さが深まる11月中旬以降にコントラストがはっきりしたものになります。出荷の1週間前くらいに最終の葉かきを行い、外葉を2～3層残して草姿を整えましょう。

→
「F.晴姿」と「F.ウインターチェリー」のアレンジメント。
葉牡丹はフラワーアレンジメントに欠かせない存在となってきた。



グリーン葉牡丹の栽培のポイント

茎を細くヘッドを小さく作るのがポイント

4月11日播種、200穴トレイで育苗。4月30日定植、露地栽培。12cm株間の2本植え（写真左）。葉かき作業はこまめに行い、茎が太くならないように管理します。草丈を確保するには、最低温度15℃を保ち、露地栽培では5月以降の播種が適切です。その他の管理は従来の切り花葉牡丹の栽培に準じます。

新花材として注目されている！

葉牡丹といえば「紅白」「正月」「冬の花」といったイメージがありますが、このグリーン葉牡丹は高性葉牡丹を早まきして着色させずに緑葉で出荷し、最近注目されています。

これまでのグリーン素材にはない葉牡丹特有のボリューム感や個性的なフォルムが注目され、さらに花もちがよいという特性もあり、フラワーアレンジメントやディスプレイ花材として人気が高まっています。

→
特有のボリューム感や個性的なフォルムが注目されているグリーン葉牡丹。



↑グリーン葉牡丹の細作りは、鉛筆と同じくらい茎が細い。高度な栽培技術が必要。

